



# 山谷源次郎・ 山谷孤児院年表

- 安政 5年 (1858年) 山谷源次郎、能登国珠洲郡（現石川県珠洲市）で出生
- 明治 9年 (1876年) 源次郎、松盛チイと結婚し10年間は行商人などをしながら東北・北陸などを遍歴
- 明治 18年 (1885年) 源次郎来道し、函館に「幼者救済所」設置。長男・一二三が出生
- 明治 22年 (1889年) 父・与作が死亡。石川県に帰郷し家財を整理
- 明治 24年 (1891年) 再来道し、函館から小樽区高島郡（現在の小樽市高島）に移転し、「困窮者救済所」設置
- 明治 28年 (1895年) 奈江村に「山谷幼稚者救済事務所」設置。奈江村戸長役場設置
- 明治 31年 (1898年) 石狩川が氾濫し、被害を受ける
- 明治 32年 (1899年) 再び石狩川が氾濫し、被害を受ける。孤児一同小樽の家に避難し再建策をたて、10月に来砂
- 明治 35年 (1902年) 山谷孤児院へ改称。本院を砂川とし、東京、札幌（現在の札幌育児園の原形）、旭川（現在の旭川育児院の原形）、函館に支院設置。三井物産(株)砂川木挽工場設置
- 明治 36年 (1903年) 夕張支院設置。奈江村が砂川村へ
- 明治 37年 (1904年) 日露戦争による戦災孤児が増加。本院の孤児が一時200人を超える。十勝国河東郡中音更（現音更町）に開墾従事班設置。群馬県に沼田支院設置
- 明治 38年 (1905年) 旭川支院が独立し上川孤児院となる
- 明治 40年 (1907年) 樺太大泊（現ロシア・サハリンコルサコフ）に支院設置
- 明治 44年 (1911年) 大水害のため院舎や財産の大部分を流出。長男・一二三が院長に就任
- 明治 45年 (1912年) 源次郎が札幌区苗穂（現札幌市中央区北3条東13丁目）に山谷孤児院設立。東京支院閉鎖
- 大正 2年 (1913年) 夕張孤児院（旧夕張支院）閉鎖
- 大正 4年 (1915年) 本院建物を売却し孤児の募集停止。砂川市街南端に院舎を移す
- 大正 10年 (1921年) 上川孤児院閉鎖。孤児が成長したので山谷孤児院を閉鎖
- 昭和 5年 (1930年) 源次郎、札幌で没す。73歳

郎の父の財産整理によるものが大きく、自立経営は厳しかったのではと考えられています。

## 山谷孤児院の理想と運営

**明** 治以降の困窮者に対する救済は、家族制度を重んじ、救済責任を血縁者・地縁者に持たせようとする考えでした。

風水害や火災など本人に原因があるわけではないにもかかわらず、公的扶助制度を設けることについては国家財政が貧弱なことに加えて、怠惰により貧困者をさらに増加させるものとして、政府や国会も極めて消極的でした。今日のような社会福祉施策とは雲泥の差があり、「一家心中」というような悲惨なことが後を絶たないことを思えば、当時の情勢がどのようなものであったか想像には難くありません。

源次郎は、孤児院を運営するには何よ

りも資金が必要であり、運営の決め手になることを知っていました。地元の能登などでの資金援助や砂川での三井物産(株)砂川木挽工場での委託を受ける方法、各地で音楽・演芸をすることで孤児院の資金を賄っていました。

ただ、ここで疑問になるのが、どうして大都市に本拠地を置かなかつたのかということ。一般的なことを考えてみると、社会事業施設は都市の方がはるかに有利と思われまふ。有力な援助者が多くいることに加えて、職業訓練などもしやすく、収入源となるような物品の加工・委託販売などの会社が多く存在するなどの利点があるからです。源次郎は全国各地を遍歴していることに加え、10年間施設の経営にあたっては、その辺の事情はとうに知っていたはず。源次郎が目指していたのはそのようなこととは比較にならない「孤児の国」を築き、孤児といえども自立して社会人となり、

孤児たちが孤児院を運営していくという構想を掲げ、活気ある砂川の地にその光を見いだしたかもしれませぬ。



砂川本院の子どもたち

## 山谷孤児院での活動

『郷土研究第11集』に掲載されている、昭和46年当時、郷土研究会会員であった片山敬二氏が聴取をした見奈美清一郎氏（山谷孤児院に明治35年頃に入院）の証言を紹介します。

10歳ほどの時に、山谷孤児院に入院をし、幻灯や活動写真の係だった。家では菓子を作り奥さんが街の店で売っていた。お寺や劇場、学校を借りて幻灯や演芸会を催した。演芸会は琴や劇などをやった。今流にいえば山谷氏は興行主で、木戸銭を養育費にあて、寄付金も仰いだ。砂川や札幌、小樽に加え東京も行った。音楽をやるといふことで、軍隊の音楽隊の服を払い下げてもらって演奏隊をつくった。

現在の労働基準法ではもちろん児童を働かせることは考えられませんが、当時は行政からの手当は雀の涙程度で、働かないと生きていくこともままならない時代でした。そのほかにも、授産施設で木材部、鍛冶部、農耕班などを設けるなど、孤児たちに手に職をつけさせて自立させるという目的もありました。授産施設は孤児たちの職業訓練の場でもあり、こうした施設経営の基盤づくりは目を見張るものがあります。

## 山谷孤児院各地で支院を開設

全国的に「山谷孤児院」の名が知られてくると孤児院の前に子を捨てたり、孤児院行きの荷札を付けて列車で送られてくる子もいたと言われています。明治35年には東京支院をはじめ、群馬県沼田支院（現沼田市）、長野県赤穂支院（現



巡業中の少年音楽隊（群馬県足利）



旭川支院

駒ヶ根市）、札幌支院、旭川支院、夕張支院、函館支院、樺太大泊支院（現ロシア・サハリン）にあるコルサコフ）を設立するなど、まさに源次郎が目指す「孤児の国」を果たしていききました。

入所児童数の詳しい資料は洪水などで流されてしまい北海道庁における統計書に頼らざるを得ない状況ですが、本院は明治40年に111人、同42年に121人、各支院を合計して見ると192人をピークに同43年に93人などとなっており、水害や凶作などがあつた年は200人を超えてる人が入所したと思われれます。

## 山谷孤児院の終えん

たび重なる石狩川水系による洪水によつて、山谷孤児院は終えんを迎えてしまいました。明治38年の洪水では小樽の山谷家に避難し、同42年には工場など建物

もろとも流出してしまったことに加えて、同43、44年も洪水が重なり、各支院への援助も停止。同45年には本院の経営規模を縮小しました。本院のそばをパンケ歌志内川が通っており、洪水が直撃してしまいました。同44年には源次郎は院長を退き、長男の一二三に院長職を譲り、大正4年には入所を停止させ建物を売却し移転、同10年には孤児院を閉鎖しました。源次郎は孤児救済事業を続けるべく、札幌区苗穂（現札幌市中央区北3条東13丁目）に転出し山谷孤児院を小さいながらも続け、生涯最後まで孤児とともに生きました。

## おわりに

孤児にとどまらず乳幼児から大人まで山谷孤児院に入院をさせており、年齢や性別、障がい、出身、地域も限定させておらず、源次郎はあらゆる人を深い愛で包み込んでいます。源次郎の長男である一二三の妻・志希が「慈善を求めて各戸を回る孤児の群れに社会の目は決して温かくなかった。乞食（原文ママ）という見られ方もされたと思う」と話すように、山谷孤児院だけでなく、慈善事業に対する冷たい背景もあったと思われれます。

しかし、開拓されたばかりの砂川における状況は違い、目が見えない子どもたちなどへ砂川尋常小学校（現砂川小学校）

から先生たちが訪れ夜学教室を開いたことや一号線（現南一丁目線）奥にある奥山農家（現おくやま農園）から毎年大量にかぼちゃをいただいたとの記載があるなどをもみても、孤児救済事業に関して砂川の人は非常に寛容であり、物心両面で支えていたことが見てとれます。

洪水で資料が流れてありませんが、源次郎は公的助成をほぼ受けておらず、北海道庁からはたびたび法人化などを勧められたようです。源次郎はそれを潔しとせず、孤児たちの将来を見据え監視、監督されることを特に嫌ったようです。山谷孤児院が終えんを迎えている頃には道内各地で孤児院が設立されていることを考えると、もし公的助成などを受けていれば、「孤児の国」構想はさらに前に進んでいたと考えられます。

北海道社会福祉事業の先駆者である源次郎の人を慈しむ「愛」と志の高い「希望」は今もなお砂川、そして北海道に根付いています。

### 《参考資料》

- ▽山谷一夫『山谷孤児院概史』
- ▽砂川市教育委員会『郷土研究』第11、14、35、36、38、40集
- ▽大枝連蔵『最近の砂川』、大正3年12月
- ▽平中忠信『福祉に生きる 山谷源次郎』大空社、1997年11月27日
- ▽山谷一夫氏の手紙など

# 「砂川の歴史」を郷土資料室で

——郷土資料室員 本山 志郎

郷土資料室では、今回特集をした山谷孤児院の資料はもちろんのこと、市内で出土された土器や石器、化石から明治、大正、昭和、平成の変遷を見ることができます。

砂川は「川」に泣かされ、「川」で発展をしてきた土地とも言えます。開拓当時から洪水に悩まされてきた土地でしたが、明治から始まる三井物産(株)砂川木挽工場や砂利採取、昭和初期からは東洋高圧(株)で大きく発展しました。現在は石狩川の新水路完成や砂川遊水地の整備によって水害への不安解消は大きく前進し、広大な河川敷地は市民の憩いの場となっています。

数々のジオラマや資料などを見て、その先人の苦勞した足跡をたどることで、砂川の未来を考えることのできる場所だと思います。床一面に広がっている、現在の砂川市街地の空撮写真もありますので、子どもから大人までぜひ来てみてほしいと思います。

また、砂川での古い写真など貴重な資料がありましたらご連絡をいただきたいと思いますし、貴重な資料を整理してくれるボランティアも随時募集中です。お問い合わせは郷土資料室までお願いします。



- 利用時間 9:00 ~ 17:00 (年末年始は休室)
- 入室料 無料

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスクの着用と自宅での検温をお願いします。また、発熱の症状がある方や体調の悪い方は利用をご遠慮ください。

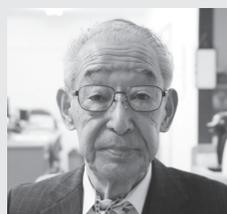
## 北海道の歴史・文化をたどる

### 「先人カードめぐり」先人カード配布中

北海道内各地の先人たちのゆかりの地を巡りながら、そこでしか手に入らない限定カードを集める「先人カードめぐり」。砂川では「山谷源次郎」の先人カードを配布中です。枚数には限りがありますので、ご希望の方は公民館窓口までお早めに！

#### ■ 配布場所・時間

公民館窓口 9:00 ~ 21:00  
(土、日曜日は 18:00 まで)



源次郎のひ孫にあたる  
やまや ただひろ  
**山谷 任宏 氏**  
(札幌市在住)

私の父である一夫（源次郎の孫）は山谷家の長男として、源次郎がやってきたことをなんとか残さねばという思いで『山谷孤児院概史』を作っていました。全国的に見ても、国や宗教などに頼らず個人で孤児院を経営をしていたことは非常に珍しいと思います。

源次郎については郷土研究会や演劇、郷土資料室の展示などたびたび取り上げられていますが、頭の片隅にでも市民の皆さんの記憶に残していただけると幸いです。

問 広報 聴係 Tel 54-2121、郷土資料室 Tel 54-2121